



寛先生の「デザイン思考」

池田 豊人 | 香川県知事

香川県知事の池田豊人です。寛先生、大変お世話になりました。これからも引き続き香川の発展にお力を貸してくださいますようお願いします。

寛先生と初めてお会いした際に、先生から「これからは、デザイン思考が重要だ。」とお聞きしました。それから、先生とは、先生との対談や、希少糖の研究現場の見学、また、様々な会合での懇談など約1年間の間に数多くの懇談の機会をいただきました。それを通じて、先生の言わんとしている「デザイン思考」がおぼろげながら理解できてきたかなと感じております。そして、先生と会って話している際に先生から感じる、積極性、前向き思考、軽やかさはこの「デザイン思考」からもたらされるものかとも感じます。

ところで、香川県の前の知事に、金子正則知事がおられました。1950年から1974年まで知事を務められた方です。金子知事は「デザイン知事」と呼ばれ、丹下健三設計の香川県庁舎をはじめ公共物のデザイン化に尽力するだけでなく、「政治はデザインだ」をモットーに、県政の課題を次々と実現していったと言われています。私の推測ですが、寛先生のいわゆる「デザイ

ン思考」と相通じるものがあるように思います。

また、「デザイン思考」は、具体的な造形やモノづくりによって養われる要素も大きいと思います。その観点からいえば、香川県にはデザインの素養がある方が他県に比べてたくさんおられるように思います。香川県が歴史的に「アート県」であることに起因していますが、例えば、高松工芸高校から毎年125名の芸術系3学科の卒業生が送り出されていることも大きな要因の一つだと思います。香川県は、これから「デザイン思考」よっての発展を目指したいと思います。

寛先生は2001年に香川医科大(現香川大医学部)教授で香川に来られて、おおむね四半世紀にわたり、香川県の発展にご尽力、ご貢献いただきました。あらためて感謝申し上げます。この寛先生が、長い間にわたって若い学生さんや香川県に浸透させた「デザイン思考」は、これからの香川県の発展の礎となるでしょう。

寛先生、これからもご指導よろしく申し上げます。ありがとうございました。



『寛学長とのこれまでとこれから』

日比野 克彦 | 東京藝術大学 学長

寛先生と始めてお会いしたのは、2016年に副学長として東京藝術大学に来られた時でした。私は当時美術学部長として、その会に出席させていただいていました。内容は大学に新たに芸術系創造系の学部を創っていくにあたっての、東京藝大への視察で、その折には芸術系の学部の特徴などを話させていただきました。私にとって香川という地名の印象は瀬戸内国際芸術祭が強くありましたので、その地元の香川大学に創造系の学舎を考えておられるというのは、大変関心を持って寛先生と話をさせていただいたことを今でもよく覚えています。それから2年後に創造工学部が新設されました。瀬戸内海に面する香川県と東京藝大は約20年ほど前から連携し、平成30年には都道府県レベルで全国初となる連携協定を結びました。東京藝大にとっても香川県はとても親しい地域です。そしてその地域の中核大学としての香川大学に創造工学部ができたことにより、よりアカデミックに香川との連携を進める大きな推進力となりました。文部科学省「地域中核・特色ある研究大学の連携による産学官連携・共同研究の施設整備事業」を東京藝大が申請するにあたり、香川大学との連携を考えるに至ったの

も、寛学長との話の中で実現することができました。改めて深く感謝いたします。今後ますます香川大学と東京藝大の連携を深めていき日本の世界の教育研究機関として特色のある活動をしていきたいと考えています。この申請が採択されたことにより庵治のマリンステーションエリアに「芸術未来研究場」が生まれ、今後の両校の拠点となっていく予定です。また、2022年から始まった東京藝術大学瀬戸内海分校プロジェクトの活動拠点としては同年にできた高松市内の香川大学イノベーションデザイン研究所新棟で創造工学部の学生と地元の高校生と東京藝大出身のアーティストらとのワークショップを行っており、互いの大学の特性を活かした文理融合の教育が実践することができています。このような環境から次の社会を動かしていく人材が育っていくことだと確信しています。私は学長2年目ですが、寛学長の6年にわたる大学運営の実績を見習って頑張っていきたいと思っております。長年の大学での活動お疲れ様でした!さまざまな機会で今後ともご指導をよろしく願いいたします。

れます。知の拠点である大学は、何よりも論理的思考による真理の探求を大切にしています。とりわけ大学院では論理的思考を徹底的に磨く場であります。長い人生の中で研究に没頭するひときは、皆さんの人生にとってかけがえのない経験になると思います。

香川大学大学院はこれまでに7861名に対して修士ないしは博士の学位を授与してきました。本日はその先輩方の中から、香川大学を代表する希少糖の研究者である香川大学名誉教授 何森 健農学博士のことを少しご紹介したいと思います。何森先生は岡山県玉野市のお生まれで高校まで玉野市で過ごされた後、本学農学部に入学されました。先生は瀬戸大橋が開通する1988年までは、高松港と宇野港をつなぐ宇高連絡船でご実家と大学を行き来されていたようです。農学部の研究者となり、微生物の持つ様々な酵素の研究を開始された何森先生でしたが、博士論文の研究テーマをどうしようかと考えながらいつもの様に宇高連絡船に乗船されて瀬戸内海の海を見つめておられたのでしょうか。先生はユニークな性質を持つ微生物が瀬戸内海には存在するに違いないと着想されたようですが、甲板からバケツで海水を採取しても浅い表面の海水しかすくい上げられません。深い海中の海水を何とか採取する方法がないかと思案に暮れておられたある日、いつもの様に連絡船に乗船すると、連絡船の船体の横から勢いよく水が噴き出しているところが目に留まりました。船長に尋ねたところエンジンを冷やすための海水であり、海中から吸引した海水でエンジンを冷やしたのちに船外へ海水が噴出されていることが分かりました。若い香川大学の研究者が変なことを言い出したと船長さんは思ったようですが、何とか船長の許可を得て、何森先生は乗船のたびに機関室の底で瀬戸内海の海中5-6メートルから吸い上げられた海水を採取し、研究室へ持ち帰られました。この時、瀬戸内海の海水から分離した微生物由来の酵素がD-アラビノース・イソメラーゼという酵素だったのですが、このD-アラビノースはのちに偶然にも希少糖に分類されることになりましたし、イソメラーゼという酵素は希少糖の生産に利用できる酵素の一つになっています。農学博士を取得された何森先生はその後も微生物の持つ酵素の研究を根気よく続けられ、香川大学農学部の食堂脇の土の中から採取した微生物を培養し、D-タガトース 3-エピメラーゼという希少糖を生産する最初の酵素を発見されました。現在では50種類を超える全希少糖の設計図を明らかにし、希少糖研究の第一人者となられた何森先生ですが、希少糖生産酵素の発見につながる先生のご研究の足跡には、研究者

にとって大事な教訓がたくさん詰まっています。瀬戸内海の海水にはユニークな活性を持った酵素を持つ微生物が存在するに違いないという着想に基づき、瀬戸内海の深くから海水をサンプリングされた過程は、おそらく毎日毎日、瀬戸内の海水のことを考え続けておられたからこそ気が付かれたことでした。そして、普通の客には入ることのできない機関室に入り込むため、船長さんを口説き落とした熱意と粘り強さ、何回も失敗を重ねられた上で目的にかなった酵素活性を持つ微生物を発見し、ついには論理的な手順で全希少糖の設計図を完成させてしまったエネルギーなどです。研究に失敗はつきものですが、一方で思ってもみない発見に辿り着くのも研究の醍醐味です。皆さんも粘り強い頑張りで、この醍醐味をぜひ味わってみたいと思います。

さて、ICT技術の発達もたらした様々なオートメーション化による第3次産業革命を経て、IoTの進展やビッグデータの集積、さらに人工知能というコア技術がもたらす第4次産業革命の時代に入らし、人間の心理的側面にも大きな変化の兆しが見えます。人工知能やロボットが人間の仕事を肩代わりする時代になり、労働時間は今後徐々に短縮し、人々は余った時間を如何に幸福に消費するかに関心をより注ぐ時代になってきました。当然、産業の在り方も変化し、大量生産や画一的なサービスを提供する時代は終焉を迎え、人々は付加価値のある、よりカスタマイズされたプロダクトやサービスを求める様になっています。香川大学で学士教育から大学院教育まで一貫しての教育の柱としているDRI教育のD、すなわちデザイン思考は、人間中心のイノベーションを生み出す手法を学ぶものです。皆さんには大学院での研究に邁進していただくとともに、ぜひデザイン思考の手法を体得していただきたいと思っております。日本の国際競争力は平成初期の頃は世界1位でしたが、現在は30位前後に沈んでおります。この復活のためには研究力の復活が急務といわれています。研究の内容に関しても、学問分野の垣根を残した縦割りの研究や、既存の研究成果の延長線上の研究だけでは不十分と考えられます。分野を横断した、様々な分野が連携した研究こそが、いわゆる破壊的イノベーションにつながり、日本の国際競争力の再浮上をもたらすのではないのでしょうか。本学大学院でデザイン思考の手法を体得され、分野の異なる様々な教員の指導を受けながら、日本を復活させるイノベーションの創出に挑戦してください。期待しております。



長年のご功績に敬意を込めて

久米川 啓 | 香川県医師会 会長

寛 善行先生、長い間本当にお疲れ様でした。

寛先生は、平成13年に香川大学医学部泌尿器科教授として香川県に赴任して来られました。平成5年まで消化器外科にいた私とは、大学病院では一緒に働いた事はありませんでしたが、寛先生とは本当に仲良くお付き合いいただきました。平成29年に、寛先生が香川大学学長に就任された事に伴い、県行政の職務にも就かれ、様々な会議でご一緒させていただくようになった事も、その理由の一つですが、寛先生は医師会関係として、平成16年から香川大学医師会理事、平成22年に副会長、そして平成26年からは会長と要職を歴任され、香川県医師会の運営にご協力いただいている事が一番の理由です。寛先生には医師会関係の様々な会議にもご出席いただき、大学病院の状況や、医師会のあるべき立場など貴重なご意見を頂戴しました。平成28年には、年に一度、香川県医師会主催により開催しております「香川県医学会」を香川大学医師会長として担当していただき、6つの会場での一般演題とともに、研修医を交えた「ライブカンファレンス」を企画し、大学病院の先生方のご協力もあり盛大な学会となりました。また昨年度、綾歌地区医師会が担当した同学会では、

特別講演として「AI時代の日本の医療」についてご講演いただき、多くの会員の勉強となりました。

このように、寛先生におかれましては、医師会活動に深く携わりご協力いただいており、行政等の様々な会議でも顔を合わせ、また懇親会でも同じテーブルに着くことが多く、寛先生の先進的で先見のあるご意見を伺う度、尊敬の念を抱いております。寛先生とは同い年という事もあって、一方的かも知れませんが親しみを感じており、個人的な会にもお付き合い願う事もあり、二次会にまで及ぶ事も度々でしたし、時には酔った勢いでとんでもない時間に電話をし、ご迷惑をお掛けした事も1度や2度ではありません。今から考えるとご迷惑であった事は間違いなく、ご容赦いただきたいと思います。

寛先生はこれからも高松におられるとの事。公的な会議でお会いできる機会は少なくなるかも知れませんが、今後も個人的にお付き合いいただき、大所高所からの意見を伺いたいと思いますので、突然の電話にも笑ってご対応いただきたいと思います。

寛先生の今後益々のご活躍とご多幸を心よりお祈り申し上げます。



寛先生との出会い

佐伯 勇人 | 四国電力株式会社 取締役会長

私はかつて、入社式で新しい仲間を迎えるに際し、毎年次のようなメッセージを送ってきた。「今後の会社生活においては、多くの上司や先輩に巡り会う。皆さんには、是非、そうした先輩たちの中から『目標とする人』を見つけ出してほしい。単に職業人としてだけでなく、社会人として、あるいは人間として、こういう人になりたいと憧れる人を見つけてほしい。そういう人を見つけることで、自分が成長していくうえでの道標ができるし、困ったり悩んだりするときに、必ずや皆さんの心の支えにもなるはずだ」。

私も、入社以来様々な業務を担当させてもらい、多くの上司・先輩から指導を受けてきた。その時々の特徴ある持ち味の方に巡り会い、ものの考え方や仕事の進め方などについて教示を受け、自身の人格矯正にも大きな影響を与えていただいた。そんな巡り会いを通じ、いまでも心に残り憧れ続けている方が何人かいらっしゃる。既に鬼籍に入られた方も少なくないが、それらの先輩の方々には共通点がある。「自然体であること」「大局観と歴史観を持ち合わせ、目線高く物事を洞察されていること」「専門分野のことも素人に分かり易くお話になること」などである。それともう一つ、何故か、文系の身でありながら、憧れの対象は理系

の方ばかりである。

寛先生との出会いは、副会長として四経連の仕事に携わりはじめ、何かの会合でご挨拶させていただいたのが最初ではなかったかと思う。その後、縁あって香川大学の経営協議会メンバーに加わせていただき、寛先生の大学経営に対する考え方や、社会情勢が大きく変容する中での先進性に富む学内改革施策の数々を拝聴する過程で、日増しに畏敬の念を抱くようになった。また、面会の機会にしばしば医学関係の質問をさせていただいたが、専門家としての気負いの欠片もなく、常に噛んで含めるように解説して下さったことは、印象深く記憶に刻み込まれている。古希近き齢になって、新たに私淑する方に巡り会えるとは思っていなかったが、この幸運を素直に喜び大切にしたいと思う。

寛先生におかれては、多くのファンの皆さんに惜しまれつつ、残念ながらご退任されることとなった。素晴らしいお人柄、そして類い稀なる才能を発揮され、今後とも幅広くご活躍されんことを心から願っている。そして、私の我儘ながら、いつまでも人生の先達として、胸に留め置かせていただければと思っている。



寛学長のご退任にあたって

綾田 裕次郎 | 株式会社百十四銀行 代表取締役頭取

寛学長におかれましては、6年の長きにわたり香川大学学長という大変な重責を全うされましたこと、本当にお疲れさまでございました。私は、香川大学の経営協議会学外委員を拝命する機会を頂いたことで、寛学長との知己を得、その後親しくお付き合いさせていただいております。

寛学長が、「DRI教育」をはじめ大学のさまざまな改革に辣腕をふるってこられたことは、誰もが知る所ではございますが、大学内における寛学長の手腕や評価については、学内の方におまかせするとして、大学の事情に疎い私は、学外の一社会人の目から見て感じた寛学長の印象をご紹介します。と思います。

まずもって印象に残るのは、私は仕事柄、経済団体を中心に多くの組織や団体に首を突っ込んでいますが、そのさまざまな会合において、頻繁に寛学長をお見掛けする機会があったということです。

ある時は経済団体の会合でご講演に熱弁をふるい、また他の会合では、さまざまな業界の方々と親しく談笑される姿を拝見するなど、色々な機会を捉えて情報発信をされておられまし

た。加えて、テレビや新聞、雑誌などさまざまなメディアにも積極的に出演・出稿され、香川大学の顔として、大学の果たす役割や地域の在り方に一石を投じてこられました。言わば、学長兼スポークスマン兼営業マンであり、地域の課題解決のための産官学金を繋ぐ架け橋の役目を担っておられました。寛学長は医者、教授、学長というどちらかと言うとクローズドな社会に身を置かれてこられた方ですが、前述のような献身的な働きぶりを拝見するにつけ、一般の民間企業に勤められていたとしても大出世をされていたことと私は確信しています。

図らずも私のようなものが本原稿の執筆をさせていただく榮譽に浴することになりましたが、学長の退任記念誌の発行は、今回が初めてとのことで、学内から記念に残したいという声が上がってきたことを見ても寛学長のたぐい稀な業績と温かいお人柄を知ることができるのではないのでしょうか。

今回で学長は引かれることとなりますが、今後も健康にご留意の上、香川大学や地域の応援団としてそのお力を存分に発揮いただきたいと願っている次第でございます。



寛学長 ご苦勞様でした

金子 元久 | 筑波大学特命教授・東京大学名誉教授

寛学長と個人的にお話する機会は多くなかったが、いま思いつくのは相撲がお好きだったことだった。あるいは私が相撲を好きだということを知って、話を合わせてくださったのかもしれない。同じく経営協議会の委員で、故人になられた千葉昭元四国電力会長も大変にお好きだったようで、経営協議会の前の控室での雑談では話が盛り上がったこともあった。あのような機会が、コロナ禍で奪われてしまったのはきわめて残念だ。

相撲を離れて、大学のトップとしての寛先生は、(そう言っでは失礼だが)地方国立大学の学長としては、鮮明なリーダーシップを発揮されたと思う。周知のように、国立大学は2004年の法人化からこのかた、「改革」のプレッシャーにさらされ続けてきた。ただ、この改革に政府が具体的なイメージがあるかといえ、そうとはいえない。とにかく、何か改革したと見える状況が作られることが求められるともいえる。

しかし特に地方国立大学では、改革のもとになる教育・研究の基盤が強固とは言えない場合が多いし、地域との連携といっても地域の人的・物的資源も限られている。その中から何かを掘り出し、育て、それが「見える」ようにしなければならない。私

はこれまで政府の審議会などで、国立大学改革に関する議論にかかわってきたが、香川大学での議論に関わるまではこうした苦衷を十分に理解していなかったと思う。

他方で、地方大学の先生方が大学の将来を十分に考えて発言し、行動しているかといえば、必ずしもそうとも言えないのではない。そして寛学長は、この改革への圧力と現場の認識とのズレに、一つの明確な姿勢をもって臨まれてきた。それが経営協議会での議論を通じての私の感想である。それは必ずしもどのような学長にもあてはまることではない。そしてその香川大学の将来への意味は大きいと思う。

ただ、この取り組みはまだ終わったわけではない。香川大学の構成員の方々には、寛学長の姿勢が何を意味していたかを、あらためて考えていただければと思う。そして寛学長にはこれまでのご努力に、ご苦勞さまで申し上げたい。



香川大学のイノベーションを 強力に進めた家康型リーダーの寛学長

神余 隆博 | 関西学院大学 理事
国連・外交統括センター長

国立大学法人香川大学の第四代目の学長として、寛善行学長は大活躍をされました。そのリーダーシップは、地方の国立大学の存在感を十分に高めるものでした。

寛学長は、「持続可能な地方分散型社会のみが日本が生き残るシナリオである」との予測に基づき、香川大学をそのような大学にするために、ブランド力の強化と広報活動にも注力されました。本当に稀有な学長であったと思います。

学長任期中に起きたコロナのパンデミックは、大学運営にとっても、また大学教育そのものにとっても大きなチャレンジであったにも関わらず、寛学長は高度なマネジメント能力とリーダーシップによって、これをチャンスと捉え、デジタルトランスフォーメーション(DX)化を学内に普及しました。

さらに、寛学長の下で教学関係の改革が一層進展しました。特に、DRI教育と呼ばれるデザイン思考教育とリスクマネジメント教育に加えてデータサイエンス基礎力の養成という三位一体の思考が、香川大学の教育改革の特徴を示すものとして推進されました。一見あまり関係のない要素が結びついて、思わぬイノベーションを生むのですが、具体的には創造工学部や創発科学研究科などの設置につながっていきま

した。そしてそれらをまとめたイノベーションデザイン研究所において、香川大学発のユニークな研究が展開されています。

リーダーというのはその組織の向かう未来を示し、常に自らが先頭に立って道を切り開いていく存在ですが、まさに寛学長はそれを体現されているように思います。寛学長の育った愛知県(尾張と三河)は多くの戦国時代の指導者を生み出していますが、寛学長がどのようなタイプのリーダーであるのかを推測するのは容易ではありません。私は、むしろ家康型のリーダーではないかと思

います。イギリス風に言えば、リーダーが備えておくべき資質は情報を的確に判断することと、常に精神の安定を保つことです。英国の貴族や外交官が持つべき資質の中で、私が重要だと思うのは、「機嫌が良い」ということです。英語で言うところのグッドテンパーですが、寛学長はこのグッドテンパーを誰よりもよく備えているように思えます。その意味で家康だと思います。これはリーダーとして必要な資質です。アンガーマネジメントがきちんとできるタイプの人間であり、また社交性も備えているということです。

最後に、これまでの寛学長の香川大学への貢献はもとより、香川大学が存在している香川県及び香川県民への優しいまなざしに対して、香川県出身の私も心から感謝申し上げます。本当にお疲れ様でした。



寛学長 ありがとうございます

田中 壮一郎 | 一般財団法人
学生サポートセンター理事長

寛学長、6年間にわたり香川大学の大改革を断行していただき、本当にありがとうございました。

香川大学が一丸となって、社会の変化や地域の要請に応え大きく変化し、具体的な目標や成果を掲げ積極的に活動されている様子に感激の念を抱いています。

特に、工学部の改組並びに工学研究科と人文系の3研究科を融合させた「創発科学研究科」の創設に対して、工学部の設置に若干係わった者として心より感謝申し上げます。

私は、平成6年から3年間、香川県の教育長を拝命しましたが、当時の平井城一香川県知事の悲願であった「林飛行場跡地に国立大学の工学部を」の実現に向け、私も香川大学工学部誘致に取り組ませていただきました。文部省の「農学部改組により三木町に自然科学部を設置」という方針に、用地の無償貸借制度を設け、飛行場跡地への工学部の誘致を平井知事のお供をして陳情してまわりました。

その後、私が文部科学省スポーツ・青少年局長時、香川大学工学部の一期生が文科省に入省したと聞き、本当にうれしかったことを覚えて

います。

しかし、近年、香川大学工学部の受験生の質量ともに低下してい

るのではないかと、民間からの教官が少なくなっているといった噂話に接するたびに心配していました。

寛学長が副学長時代から工学部の改組に取り組まれ、平成30年4月にスタートしたデザイン思考教育とリスクマネジメント教育を両輪とする創造工学部は、真に社会の変化や、進学希望者はもとより地域の要請に即したものだと思

います。香川県はもとより全国から注目されていると聞いており、大変有難く思います。さらに、香川大学のみならず「大学」に固有の学部毎の縦割りに大胆に切り込んだ「創発科学研究科」の構想には、胸のすく思いがしました。一井学長の頃から取り組んできたことが、寛学長のリーダーシップと英断のもと実現されました。令和6年4月には創発科学研究科博士後期課程が設置され、香川大学全学部の教官の方々の理解と協力・連携のもと総合的な運営がなされ、人材育成・研究両面にわたり社会の諸課題にすなやかに対応し、持続可能な社会の実現に貢献されることを心より期待しています。

いづれにしましても、この6年間の寛学長の高いご見識と決断力・実行力のもと、様々な改革が推進されましたことに、心より感謝申し上げます。



寛先生の退任にあたって

西原 義一 | 前香川県副知事

学長としての六年間、大変お疲れ様でした。これまでの御功績に敬意を表します。寛先生とは副知事での在任時期とほぼ重なったこともあり、様々な場面でお会いする機会がありました。ご挨拶やお話される場に居合

わすたびに、高い専門性を極められた自信と幅広い学識に裏打ちされた話しぶり、よどみなく、時に流暢な英語でスピーチされる姿には感心させられましたし、当然ですが会議の運営も段取りよく進行されるので、お手本にしておりました。経営協議会の委員として、大学経営に関わる機会をいただきましたが、寛先生は一貫して戦略的な思考で意思決定しており、その思いは学長戦略室を平成30年3月に設置、メリハリをつける学長戦略経費の予算計上等に

参み出ているように思います。また、寛先生が、いかに香川大学の存在感を増すために注力し、様々な改革に意欲的に取り組んでこられたかは言を俟たないところと思います。少子化、グローバル化の時代にあって、4年間高等教育を受けさせ、愛着を持って定住し、進取の気概に富む若者を育てることは、香川県の将来にも関わることであ

り、地域貢献や産学官連携とあわせて、県行政の立場を理解されつつ大学の役割、位置づけを確かめながら、多方面で御協力と御配慮いただいたことは有難かったです。

令和の時代に入り、新型コロナが社会経済活動に大きな影響を及ぼすことになった約三年間は、学生との距離感をはじめ大変な気苦労があったと思います。三密回避のため、リモート会議の普及やweb活用による情報提供など高度化したデジタル機器の活用が急速化していく中で、これも時の流れと思いつつ、対面での会合や宴席が激減したことは残念でした。この間、ワクチン接種など医療面においても多大な御協力をいただいたこと本当に感謝いたしております。

さて、随分以前になりますが、プライベートでお酒をご一緒したことがありました。初対面の頃でもあり、あまり話せなかったという記憶があります。新型コロナで行動制限が続きやむを得ないところでしたが、もっと懇意になれる場面が作れたらうにとの、今更ながらの思いです。ほぼ同世代、健康にまつわる話で花が咲き美酒に酔うような機会でもあればと思っています。これからもお元気に活躍してください。



寛学長の思い出と6年の振り返り

藤岡 実佐子 | 帝國製薬株式会社
代表取締役社長

私が寛先生に初めてお目にかかったのはもう十年以上前になると思います。知人の開いた食事会の席でした。医学部の先生ということは存じていましたが、白い巨塔のエライ先生という堅苦しいイメージは全くなく、ワインを愛する明るく穏やかな先生というイメージでした。それからほどなく、ある治療について多くの病院の先生によって書かれた一般者向けのガイドラインの編著者として寛先生のお名前があるのを偶然に見つけ、先生が大変な名医でいらっしゃるということを遅まきながら知ったのでした。私は2015年から香川大学の経営協議会委員を拝命しておりますが、3年目に先生が学長に就任され、そこで、名医の先生は名経営者でもあることが判ったのです。香川大学は元々実学志向で、学んだ専門知識を生かして社会に貢献することを理念として掲げていますが、寛先生はこれを更に発展させ、DRI教育を三位一体として推進されました。問題解決を目指すモノ/コトの追求としてのデザイン思考、それを支える安全性担保としてのリスクマネジメント、そして今後すべての局面に不可欠な情報リテラシーを一体化して学び、イノベーションを起こせる人材を育てるという意欲的な取り組みで

す。これはもともと香川が抱える地域の問題を新たな価値の創造で解決しようという取組みなのですが、香川だけでなく全国、或いは地球規模での問題解決の道にも繋がるものだと思います。その一環として創造工学部が、さらに学部

の枠を超えた創発科学研究科が設置されました。このように、従来の学部別の学問領域を換骨奪胎させて問題解決に創造力

で向かっていこうという先進的な仕組みまで実現してしま

った先生の実行力は素晴らしい、経営者の端くれとしては見習わなくてはなりません。在任中コロナ禍での運営に苦

労されながら、これらの改革に取り組まれた寛先生は、た

くさんの抽斗を大きな懐にしまってい

らっしゃる方なのでしょう。6年間、本当にお疲れさまでござ

いました。学長を退任された後は、果たしてどの抽斗から何をな

さるのか、そんなワクワクした期待さえしています。どうぞこれ

からもお元気で過ごしてください。



創発～彩ある学問の府への第一歩

安井 順子 | 監事

寛先生、6年間の香川大学の学長の任務満了おめでとうございます。また、いろいろとお世話になりました。

コロナ渦ではありましたが、中四国地区の国立大学法人の監事の先生方とお話(リモート含む)をする機会が多々あり、その中で気づいた寛先生の率いる香川大学の特色です。

まず一つ目ですが、監事は役員会では陪席という立場で発言は原則慎むべし、という不文律があるようですが、寛先生は必要と思われるところは監事も指名していただき、自由に発言しやすい空気を作っていました。現在では、役員、事務方も交え、前向きに議論をしやすい雰囲気となっています。

次に、寛先生が学長ご就任時に、学生、先生方、事務方が奏でるオーケストラの指揮者となり、素敵な音を響かせますという趣旨のご発言をされたこと記憶しております。そのためには各人が出す音の個性(能力、パーソナリティ等)をあらかじめ把握しておく必要があると思います。寛先生は、一人一人をよく見ておられて、よいところは褒め、もう一つのところは包み込み、個性を消さぬよう彩(いろどり)を残しながらもカオスにならぬよう、大学の運営に心を砕かれておられました。

また、役員会で創発科学研究科の開設にかかる審議中に、私が“そもそも創発とは”という不屈きな発言をした時に、後日、寛先生からメールで板谷先生の“「創発」とは何か”という資料を送っていただきました。個性の融和により総和を超える価値を創出するということで、寛先生が日頃からおっしゃっていることであり、役員の一員として当然認識すべき事柄で、意識が低かったと今でも恥ずかしい限りです。

最後に、コロナ渦で大学内外での交流ができず、寛先生も不完全燃焼のところがあるかと思います。今後とも、柔和な笑顔で、いろいろな方を巻き込んで、創発の志を香川大学発全国へ広めていただきたいと思います。ますますのご活躍を祈念しております。



寛学長、お疲れ様でした！

今井田 克己 | 理事・副学長(教育担当)

寛先生、大変お疲れ様でした。

私は教育担当理事として、途中からの担当になりましたが、大学として最も重要な教育を担当する理事として重い責任をなんとか果たしてこれたのは、寛学長のサポートがあってこそでした。どうもありがとうございました。

これまでのことを振り返ってみますと、まず第1には新型コロナウイルス対策にどのように大学として、対応してきたかと言うこと、これに尽きると思います。これまで、あたりまえにやってきた対面授業が完全に不可能となり、いかにして遠隔授業を含めた新しい授業体制を取れるか、そして、それは学生もちろんそうですが、教職員がいかに対応できるか、これが1番頭を悩ましたことでした。幸いにして、学生のPC必携化であるとか、あるいは本学のDX化に向けての情報基盤の整備がしっかりしていたことなど、恵まれた面があった事は確かだと思いますが、教職員そして学生も含めて、香川大学全体として皆様の協力があってこそ、何とかここまで来ることができた、と思っています。

新型コロナウイルス感染症の感染状況が最悪の時期、他大学ではキャンパス内への学生の出入りを完全にシャットアウト大学もありましたが、香川大学では寛学長の方針で、学生食堂は必ずオープンにしていたので、学生が食事に困るという事はなかったと思いますし、学生が大学のキャンパスの中に足を踏み入れる機会を無くすることなくやってこれました。これは学生の香川大学に対する愛着を育む点でもとてもよかったと思います。

現在、新入生を迎えて、キャンパスがとても賑やかになってきています。明るい雰囲気になってきました。本来あるべき大学のキャンパスの姿だと思います。これが当たり前ではないことを改めて心に留めておきたいと思います。

教育担当理事としての対応として第2の大きなポイントとしては、7年に一度の機関別認証評価だったと思います。最終的に評価委員会の委員長から講評を頂いた時に、まず最初に「香川大学の学長、そして教職員の皆様、安心して下さい。香川大学の学生さんは元気です!」と、とても明るい口調で発言していただきました。ほんと嬉しかったですね。そしてほっとしました。まあ、その実態は後から聞いてみると、コロナ対策などの大学の対応に対しての不満を学生が「元気に」声を高らかに不満をぶつけた、ということが実態だったようですが、それを、「元気です」と言う表現に置き換えていただいた評価委員の先生には感謝したいと思います。あの時、少なくとも私は非常に救われました。

そのような対外的な対応の時も勿論ですが、寛学長の運営に関して、役員はじめすべての教職員の全体を引っ張って来られたその手腕はすごいと思います。DRI棟やイノベーションデザイン研究所など建物と言う形でもレガシーを残されましたし、何よりも先生の考えが上田次期学長へ受け継がれて、着実に引き継がれていくことを大変うれしく思います。

お世話になり、誠にありがとうございました。

そして、お疲れさまでした。



法人本部での6年間を振り返って

片岡 郁雄 | 理事・副学長(研究・産官学連携・教員評価担当)

寛先生、長年に亘るご指導ありがとうございました。この間、研究・産官学連携・教員評価を所掌する理事・副学長として、日常の運営業務とともに、本学のミッションの実現に向けた様々な改革に取り組むことができ、緊張感ある充実の日々を過ごさせていただきました。

研究においては、寛先生が、研究担当理事の当時設置された、「国際希少糖研究教育機構」が本格稼働し、本学を発祥とする「希少糖研究」の学術的な展開とともに、社会実装に繋がる応用研究の飛躍的な進展をみました。また同時に設置された「四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構」は、地域の防災や強靱化に向けた様々な教育と研究を展開し、その存在感を増しています。大きく育ったこれらの組織は、いずれも、全学の研究力を結集した組織体制であり、寛先生の先見力を象徴するものです。寛先生が主導された大学院創発科学研究科を中心とする大学院改革も、分野を超えた新たな連携・融合がもたらす研究力の向上に繋がる重要な仕掛けとして動き出そうとしています。さらに、イノベーションデザイン研究所に

置かれた「リサーチファーム」は従前の共同研究の範疇にとどまらない産官学連携による新しいカタチの『未来研究』を先導されたものです。

このような研究力の強化・向上のための組織改革はもとより、日常の運営業務においても、物事の本質を見極める寛先生の洞察力は鋭く、表面的に取りまとめた報告や形式的な企画提案は即座に見抜かれ、リジェクト／リバイスとなりました。ありきたりの対応に甘んじる待ち受けの体勢ではなく、新奇性のある一歩先をリードする攻めの姿勢を求められました。これに加えて、困難が予想される状況においても、方向性を定めた後の突破力の強さと熱量の大きさは比類なく、構想の実現に向け大きな指導力を発揮されました。

急速に変容し複雑化する社会において、地方大学も地域の中核としてのあり方に転換期を迎えています。寛先生の播かれた種は芽吹き、勢いよく育っています。近未来の社会の期待に応え、香川大学の一層の発展につながる大きな実を結ぶことを確信しています。



寛学長の御退任にあたって

佐久間 研二 | 理事・副学長(企画・評価・附属学校園担当)

寛学長、6年間本当にお疲れ様でした。在任中は、新型コロナウイルスの感染拡大という未曾有の出来事もあり、非常に困難な大学運営を余儀なくされたことと思います。そのような中で、様々な改革に取り組み、香川大学の発展へ導かれたことは、寛学長の大きな御功績であると思います。

私は令和4年4月から一年半という短い期間でしたが、大学法人全体の中期目標・中期計画の立案・実施・評価等の担当でしたので、大学の将来を見通した新たな施策の企画立案等、寛学長の柔軟な発想・思考力、リーダーシップには驚かされました。また、合意形成の過程でも理事・副学長、学部長等多くの人の意見を丁寧に聞き上げ議論し新たな施策を形成していく真摯で誠実な仕事の仕方はとても勉強になりました。

寛学長の御功績は枚挙に遑がありませんが、特にDRI教育(デザイン思考、リスクマネジメント、インフォマティックス)を香川大学の柱と位置づけ、全学生に普及、浸透させたことは、本学の学生が卒業後社会で活躍する上で不可欠な能力を身に

付ける観点から、素晴らしいことと存じます。

また、新たに開設した大学院創発科学研究科やイノベーションデザイン研究所、産学共創リサーチファームを三位一体的に運用し、企業等の研究者の方々と学内研究者の協働的共創研究を推進し、イノベーションの創出に尽力されました。地域に根差した国立大学として、香川大学の存在感を一層高めたものと思います。

さらに、デジタルONE戦略を立案し、教職員及び学生の協働による大学業務のICT化・DX化を推進されました。情報化推進統合拠点整備という形で文部科学省からも高く評価され、支援を受けるに至りました。

今後は寛学長が推進し、導いて頂いた様々な施策を実現し、香川大学の更なる発展を目指し、上田新学長の下、教職員一同、一体となって努力していく所存です。これからも幅広い視点で温かい御指導を宜しくお願いします。有難うございました。



地域創生に向けて大学改革を大きく前進

川池 秀文 | 元 理事・副学長(財務・施設担当)

寛先生、ありがとうございました。

「改革は、トップが先頭に立った時だけしか成功することはない。」というのは、私が香川県庁に勤務していた時、行財政改革に取り組む中で学んだ本の一節であります。

学内で、大学改革に対する様々な意見にもかかわらず、香川大学の改革が大きく前進したのは、冒頭の言葉どおり、寛学長がおられたからだと思っております。

香川大学は、県内唯一の国立総合大学として、多様な分野の人材を育成するとともに学術研究を行う地域の知の拠点であり、地域創生に向けた取り組みを強く求められてきました。

このため、平成27年から香川県と連携・協力して、地域社会の課題解決に資する教育・研究の推進とともに、地域活性化の中核的拠点として、大学の機能を強化すべく、全学的な大学改革を進めてきました。

平成30年には、新たな価値の創造を目指した課題解決のための思考方法である「デザイン思考」能力と「リスクマネジメント」能力などの育成を基本として、アート系の造形・メディア

デザインコースや防災・危機管理コースなどを設置した「創造工学部」を新設、加えて、地域課題を踏まえた「観光・地域振興コース」などを新たに設置した経済学部の新編、国立大学で初めての試みである臨床心理科を新たに設置するなど、医学部の機能強化を図ったところであります。

このほか、寛学長在任中には、産業界との交流、共同研究を行う「イノベーションデザイン研究所」の設置、オール香川の産官学での人づくり、地域づくりに取り組む「大学・地域共創プラットフォーム香川」の設立・推進、多様な地域ニーズを踏まえた大学院の見直し、附属病院の再整備など、地域創生に向けて、大学改革を大きく前進させたところであります。

寛先生、6年間本当にお疲れさまでした。

先生の地域へのご貢献、ご功績に心から敬意を表します。

今後とも、健康にご留意のうえ、大学運営、そして地域医療においても、引き続きご尽力いただき、「持続可能な地方分散型社会の実現」に向け、香川大学が地域活性化の拠点として、大きく貢献できますよう、よろしくお願い申し上げます。



学長との思い出

真鍋 光輝 | 理事・副学長(総務・労務担当)

私が総務・労務担当理事・副学長として、寛学長と仕事で一緒にさせていただいた期間は、寛学長が学長就任前の理事時代の2年間と学長に就任されてからの6年間の合計8年間にも及びます。思えば、長い道程でしたが、臉を閉じれば、一瞬の出来事のようにもあります。

その間、寛学長からの薫陶の下、執行部の皆さんやその時々に関係した教職員・学生の皆さんと充実した貴重な日々を共有し、積み重ねた期間でもありました。特に、私の職掌柄、寛学長には、仕事に係るご報告やご相談をする機会が多く、その折々に、厳しい中にも温かい叱咤激励の言葉をかけてくださり、仕事への奮励の大いなる糧としてきました。一方で、数々のご心労を人一倍おかけしたと思います。

ところで、私個人の寛学長との思い出は尽きることはありませんが、最も印象深くに残っているのは、「コロナ禍への対応」と「大学改革の推進」という、未だかつてないほどの困難な大学運営の舵取りのために、日夜奔走されているパワフルな学長としての姿です。

百年に一度ともいわれるコロナ禍に対応するため、令和2年2月に危機対策本部を設置して以降、令和5年5月に廃止するまでの間、42回に渡る本部会議を開催し、次々と生じる予測もつかない新たな教学・運営上の事態に全学が一体となって立ち向かっていきました。私たちは、先

の見えない重苦しい雰囲気の中にあっても、DX推進を始めとする問題解決に向けた寛学長の慧眼と時にはユーモアに溢れた笑顔でのお話のおかげで、大いに勇気づけられ、明るい気持ちを持てることができました。寛学長が「学生ファースト」の軸ぶれのないどっしりとしたアンカーの役割を果たされたことが原動力となって、本学に一体感を醸成し、幾度もの苦境に耐えながら果敢に突破することができたと思います。

併せて、コロナ禍の間は、中期目標・中期計画の第3期後半から第4期前半に当たっており、学長の強力なリーダーシップの下、本学の特色を打ち出すための教育・研究・社会貢献等の諸施策を矢継ぎ早に打ち出して、大学改革の加速化を進め、本学が将来に渡って発展し続けるための礎を成す非常に重要な期間でもありました。寛学長の就任以降、着実に進めてきた大学改革については、毎年公表されている「国立大学法人香川大学学長の業務執行状況の確認結果」によると、高い評価が見られ、我々の励みとなっております。

最後に、これまでの長い間、大変お世話になり、心よりお礼と感謝を申し上げます。そして、本当にお疲れさまでした。

今後とも、何卒ご自愛専一の上、ますますのご活躍を祈念しております。



一期一会

国分 伸二 | 理事・副学長(財務・施設担当)

私の好きな言葉に、「一期一会」があります。辞書には、「一生涯にただ一度会うかどうかかわからぬほどの縁。出会いを大切にすることのたとえ」とあります。

寛学長との出会いは、まさに「一期一会」であると感じています。巧まずして、昨年八月から香川大学理事として務める機会を得、ともに仕事をさせていただいたことに、深く感謝しています。

一年程度と短い期間ではありましたが、私にとって、とても新鮮で濃密な時間でした。ある時、学長から「大学はどうですか。」と聞かれ、「新しいことをするのは好きなので。」と答え、学長が少し不思議そうな顔をされたことを覚えています。

この間、寛学長からは、大きく二つのことを教わりました。一つは、人づくりの重要性です。勤務当初に、学長から課されたミッションは、大学の目指す目標に向けて、ともに進む、有為な人材の育成です。人材を活かすことの重要性を丁寧に説かれました。「適材適所」と言いますが、寛学長の人の才能を把握し、活かす力は、誠的に確で、見事です。そこから組織とし

ての強さが生まれてくることを教りました。

二つ目は、リーダーシップの在り方です。学長は、教職員との間で、問を投げ、答を受け取るというキャッチボールを続けながら、解決に導いていかれます。自らの考えはしっかり示しながら、それを押し付けるのではなく、対話を通じて得た結論の責任は自ら取るとの覚悟を表されています。必ずしも先頭を走ることのみがリーダーシップではなく、後方から支える、「しんがり」としてのリーダーシップの在り方を教えていただきました。

また、私の目から見て、寛学長は、様々なことに好奇心旺盛で、物事を柔軟に見る、「軽やかな」思考をお持ちのように映ります。大学という大きな組織を束ねていく上で、それも一つのリーダーシップの在り方ではないでしょうか。

学長という立場は離れられますが、私としては、これからも「一期一会」の念を持って、お付き合いさせていただきたいと思っております。本当に、お世話になり、ありがとうございました。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。



寛学長に敬意とたくさんの感謝を込めて

藤本 智子 | 理事・副学長(内部統制・ダイバーシティ推進担当)

寛善行学長、このたびは御退任誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

寛学長の下で、理事として仕事をする機会を与えられましたこと、心から感謝しております。私にとって、この3年間は、たくさんの人との出会いがあり、気づきや発見があり、多くのことを学ばせて頂いた、とても大切に、光栄な時間でした。

会議での瞬時のご判断やリーダーシップからは、豊富な経験に裏打ちされた余裕を。

「地域に根ざした」学生中心の大学実現に向け、様々な改革や取組を推進してこられた、行動力や揺るぎない姿勢からは、挑戦し続ける心や説得力を。

学生や教員の一言に、心から感動し、惜しみなく称賛したり、当事者と同じように心を痛めるなど、感情豊かな側面からは、人間的な深さや共感力を。

対話を大切にされ、学生、教職員、時には学食のパート職員の話に真摯に耳を傾け、敬意をもって接せられた姿からは、深い愛情や思いやりを、学びました。

弁護士である私にとって、本業とは全く異なる大学という組織で勤務することは、未経験であるゆえ、不安と責任の重さに、ともすれば押しつぶされてしまいそうなこともございました。それでも、今まで大過なく勤務でき、楽しく充実した日々を過ごしてこられたのは、学長の温かい支えや数々の示唆があったからです。

私の拙い意見や突拍子もない発言を、温かく受け入れてくださっていたこと。

普段から氣にかけて頂き、いつも気軽に話しかけてくださったこと。D&I推進担当として右往左往している私を、力強く後押しし続けてくださったこと。特に、「ま、そんなもんですよ」「いいんじゃないですか」という言葉からは、強さと優しさ、大きな安心感を頂いておりました。

私も、学長をお手本に、自分の専門分野だけでなく、他の分野や社会の課題にも目を向け、積極的に挑戦していきたいと思います。そして、いつか「いい仕事ができるようになったね」と言っていただけよう、精進して参ります。

この原稿を作成しながら、なぜかクスッと笑ってしまう番外編も思い出します。

会議の中で時折ある、ざっくばらんな発言。「ちょっと飽きてきている」「巻きに入った」等、なんとなく感じる感情豊かな表情。茶目っ気たっぷりの物まね。素敵な満面の笑顔。何より驚いたのは、教職員との懇親会で、楽しそうにバランスボードを乗りこなしていた姿です。

私にとっては、どれも親近感を抱いた番外編です。

僭越ではございますが、ますますのご健勝とご多幸を祈念して、送別の辞とさせていただきます。寛善行学長、本当に、3年間、ありがとうございました。一つひとつの学びを、私はいつまでも忘れません。

今後とも、ご指導を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



寛善行学長先生の傍で学ばせていただきました

山神 眞一 | 副学長(学生支援・広報・特命担当)

寛 善行学長先生には、平成29年1月にお声をかけていただき、平成29年4月～平成30年3月まで香川大学学長特別補佐(学生支援センター長)を仰せつかり、令和元年10月から香川大学副学長をさせていただき、学生支援センター長、キャリア支援センター長、地域人材共創センター長、及び広報室長の役目を務めてきました。

寛学長のどなたとでもフレンドリーに向き合われる姿に私は凄い方だという印象を最初に持ちました。毎週火曜の大学周りの早朝清掃にもご一緒させていただいておりますが、地域の方々や学生さんとも気軽に話される様子や教職員をはじめ学内外の方々を大切されるコミュニケーションのお姿には、羨望の念を抱いておりました。

学長という激務の中、医師というお立場も継続され、次元の違う二刀流を実践されておられ、想像できないほどの知力、体

力、精神力をお持ちの学長でもありました。また、会議等の打ち合わせやご相談時には、内容に関する理解と対応をいつも瞬時にされるのには、驚嘆するばかりでありました。その裏付けには、学長のたゆまない探究心と張り巡らされた情報網の広さと深さがあられたものと思います。

このような学長先生ですが、大学イベントや懇親会などでは、参加された皆さんを逆に盛り上げる役を買って出るような場面もあり、寛学長の周りは、いつも和やかな雰囲気包まれていました。そのような人間味溢れる寛学長の傍で5年間学ばせていただく機会を得られたことは、奇跡であり、これ以上の有意義な経験はありません。お元気で精力的な寛学長先生であられますが、お体には十分ご留意され、学長退任後もご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



寛学長と歩んだ8年間

吉田 秀典 | 副学長(危機管理・学術・特命担当)

2015年10月、私は、長尾前学長に学術・情報担当の副学長を任せられ、大学の執行部のメンバーとなりました。執行部には、当時、研究担当の理事となられた寛学長がおられました。それ以前の2015年9月までは、寛学長は情報担当の副学長であられ、いみじくも私の「前任者」でした。引継ぎの際、寛学長は、引継ぎ業務のみならず、向こう2年間くらいのビジョンについてお尋ねになられ、そこで、私は、夢物語かもしれないと前置きをして「創造科学部構想」(当時は、まだ、「創造工学部」ではありませんでした)の話をしたところ、即、その話にすこぶるご興味を示して頂きました。寛学長は、私の「夢半分」の話に真摯に耳を傾けられ、その結果、ワイルドスピードさながらのブースターを付けたエンジンのように加速して、「創造工学部設置」に向けて話が進み始めました。

初期の「創造工学部構想」では、工学にアートのエッセンスを入れることで検討が始められたことから、私は、副学長になって一か月も経過しないうちに、当時、アートを切り口に大学改革を進めておられた佐賀大学に赴いて新学部設置の話を、川池前理事(現、香川県議会議員)とともに伺いました。私の就任2か月目には、当時の寛理事ならびに川池理事と文科省へ伺い、その後は事前相談を何度も重ね、翌年の初夏には、東京藝術大学のキャンパスにおりました。日比野芸術学部長(現、学長)にお会いして、人材等の面で協力して頂けるとの言葉を賜りましたが、学内調整は決して順風満帆

ではありませんでした。恐らく、多くの方は、寛学長の弱気な面をご覧になったことがあまりないのではないかと思います。寛学長と私は、心身ともに疲弊し、二人とも弱気になってしまうこともしばしばでした。そんな時、叱咤激励をして頂いたのが長尾前学長であり、どこ吹く風……だったのが川池前理事でした。私は、寛学長の色んなお姿を身近で拝見して、その人間味溢れる姿と洞察力に、「きっと、次期学長は寛先生だろうな」と思うようになりました。

寛学長には、上述の通り、「創造工学部」構想をはじめ、種々様々な大学業務においてご助言を賜り、自分の懐の狭さと知識／経験不足を痛感させられ、私自身とても良い成長の場となりました。実は、私はプライベートでも、寛学長のご助言に助けられたことが多々ありました。特に、愚息の進学時に、「国立大学」か、「老舗私立大学」かで悩んだことなどがありましたが、寛学長のお言葉ですとと視界が開け、その後も、愚息の進路や学業に関して、寛学長から色々のご教示頂き、プライベートにおいても、大変感謝しております。

寛学長は、6年の任期を終えて学長をご勇退されるわけですが、これからも本学の将来設計にご助言して頂き、ひいては、香川大学ならびに香川県を「持続可能な地方分散社会」へ導いて頂けるものと信じております。この度は、本当にお疲れ様でした。また、心より感謝申し上げます。



寛学長との思い出

松木 則夫 | 副学長(情報・研究・IR・特命担当)

寛学長と初めてお話ししたのは、研究担当理事に着任され、研究戦略室の室長として、室の会議に参加されたときと記憶しています。あつという間に、学長に就任され、しばらくは速くから活躍を拝見していたのですが、研究とIRの担当の副学長に指名されたとき「私ですか?」と、少し驚いたのを覚えています。私が大学で経営側のポジションに付くなどとは想像していなかったものですから。

それから暫くは、学長応接室で、理事・副学長とおいしいお菓子を食べながら会議など、少し、ゆったりした時間があつたと記憶していますが、あつという間にパンデミックが始まり、大学の運営も大きく影響を受けることになったのは、皆さまもご承知の通りです。

学長というポジションは(就任したことが無いので正確にはわからないのですが)孤独なものではないか、と思います。組織のトップというのは、最終的な決断が必要であり、結果はすべて自分の責任である、という自覚なしには、一歩も進めないものです。皆の意見は聞いたとしても、誰にも頼ることはできません。最後は学長の判断となりますので、その決断を続けて行くという大きなエネルギーを常に必要とする地位だと思います。特に、医師として、学長として、パンデミックの時に、適切な判

断を下すのは、とても大変なことであつたと思っています。

また、寛学長は、役員会などの会議の議長をすべてこなし、知らないことは、知らないと言明されて、適切に会議を運営している姿には、いつも少しの驚きと、尊敬の念を感じる事が常であります。最近のTV出演の姿を拝見して、それは、さらなる驚きとなりました。これはもう、とてもマネできるレベルではありません。

そして、学長との思い出は、やはり、イノベーションデザイン研究所の創設、教育研究組織改革の産学共創リサーチ・ファームの立ち上げです。この2つの申請の検討から申請まで、学長の指導のもとに進めているとき、採択の可否に関わらず、始めるぞ、という強い信念を常に感じていました。イノベーションデザイン研究所の新棟の設計から、開所まで、様々な議論と一緒にさせていただけたことは、私として、とても記憶に残るものとなりました。そのような機会をいただいたことを心より感謝しています。

6年という時間、大きな責任を背負いながら続けられたことに心から敬意を表したいと思います。間違いなく、新たな環境で、まだまだ活躍されることと思います。これからの活躍を心から祈念しております。



素晴らしいご縁に感謝

城下 悦夫 | 副学長(産官学連携・特命担当)

寛学長との出会いは2017年に遡ります。その年の10月に学長に就任後のある日、私にEメールが届きました。その後、高松でお会いすることになりましたが、いざお会いしてみると、本学ホームページで拝見した印象とは異なり、もの静かながらも人懐っこい笑顔や名古屋風なおしゃべりによって、雰囲気が和やかモードに変わる不思議な体験をしました。一緒に働いてみたい衝動のようなものが湧いてきたのを鮮明に覚えております。

寛学長とのプライベートの思い出は、やはり“ゴルフ”です。何度か一緒にさせていただく中で、小柄な体格から打ちだされるショットの正確性と力強さには驚きました。そしてコースマネジメントもクールでした。ラウンド中のキャディーさんとのやり取りも滑稽で、私的にはスコアの冴えないながらも楽しいゴルフでした。ある日「仕事とゴルフを天秤にかけたらどちらですか?」と冗談風にお尋ねしますと「ゴルフかもね!」と笑いながらおっしゃっていたこともありました。カバレッジの広い大学経営を日々円滑に進めるために、“ゴルフ”はきっと心身の調整業

だったのではないかと思います。

寛学長の専門は医学領域ですが、命と向き合う医療現場の厳しい体験の積み重ねによりスピード経営を実現されたのではないかと思います。また、執行部による会議進行の中で、お茶目な一言を盛り込みながら、発言者の意図を正確に把握され、平らな表現に変えて論点整理を行う采配は会議運営のお手本として大変勉強になりました。

産官学連携の担当業務の立場から、寛学長がこの6年間で展開された数々の取組みは、学外からの理解や協力体制の確立に大きく寄与したものと確信しております。それは強力なリーダーシップを発揮されて広範囲な組織をマネジメントされた賜物ではないでしょうか。本学の卒業生の一人といたしましても大変感謝いたします。

今後も寛学長らしく、健康で楽しい日々を過ごしていただけますよう、心からお祈りしております。そして素晴らしいご縁をいただきましたこと、心より御礼申し上げます。



寛学長から学んだこと

原 直行 | 副学長(国際戦略・グローバル環境整備担当)

寛学長との出会いは2015年に遡ります。当時、私は経済学部長で学部改組を任されていました。寛学長は全学の改組を担当する理事・副学長で、文科省への事前相談、説明に何度か一緒にいただきました。また、改組を巡り学部内で意見が対立したときなども相談に乗っていただきました。大変心強かったのを今でもよく覚えています。

学長になられてからの最初の4年間、私は学長特別補佐として、地域連携で仕事をさせていただきました。中でも特に思い出深いのは、JR四国、徳島大学、愛媛大学、高知大学、本学とで取組んでいる「地域観光チャレンジ」です。これは四国の地域活性化を目的として、学生たちが四国の地域資源を調査・発掘し、観光ツアー商品を造成するコンテストです。2018年の第1回コンテストにおいて、本学が金賞・銀賞を独占しました。その時の寛学長の嬉しそうな笑顔と「おめでとう」という言葉とともに握手したのも忘れられません。

学長の最後の2年間は副学長・インターナショナルオフィス

長として、近くで仕事をさせていただきました。2021年、22年はコロナ禍の中、いかに海外大学との交流、留学生の受け入れや日本人学生の派遣を再開していくかが大きな課題であり、相談させていただきました。寛学長の姿勢は、慎重を維持しつつも常に前向きであり、ここでも勇気づけられました。同時に、留学生に対する奨学金の基金が目減りしていることをいつも気にされ、多くのサジェスションをいただきました。さらに、近い将来、地域において留学生が高度外国人材として必要不可欠になることを見通して、グローバルと地域をつなぐ事業やプログラムについての有益なアドバイスもいただきました。

寛学長から学んだことは、人としての優しさ、誠実さ、大学・学生への強い想い、持続可能な地方分散型社会の実現への貢献から大学のあり方を考える長期的かつ幅広い視野です。今後もこれらを肝に銘じて私も頑張りたいと思います。

寛学長、本学への多大なる貢献、誠にありがとうございました。



寛学長のパワーと笑顔

門脇 則光 | 副学長(医療担当)

寛学長には、2015年に私が京都大学から香川大学に着任して以来お世話になりました。特に、2021年に私が副学長(医療担当)、香川大学医学部附属病院長を拝命してからは、病院のことを知悉しておられる寛先生から陰になり日向になりご指導、ご鞭撻をいただきました。誠にありがとうございました。

医学部から、文理さまざまな学部を含む全学の学長になると、バランスの取れた広い視野が必要になると思いますが、副学長として全学の会議に参加し、異分野融合、産官学民の共創、DRI教育、デジタルONE戦略、D&I(ダイバーシティ&インクルージョン)と、時代の要請を捉えた新機軸を次々と打ち出され、幅広い分野の人たちをぐいぐいと引っ張っていかれるお姿を拝見して、全体を俯瞰する学長としてのリーダーシップを実感しました。これらの構想の根本として、「持続可能な地方分散型社会」というわが国のあるべき方向性を見据えられ、香川大学、香川県の魅力をいかに強化してアピールするかに心血を注いでこられました。

こうした方針を全学構成員に浸透させるのに、寛先生の柔和かつ元気な笑顔が威力を発揮し、そのお写真やイラストを大学広報誌や本部のデジタルサイネージなどでしょっちゅうお見かけしました。先日も民放番組「カズレーザーと学ぶ。」に出

演され、「夢の太らない糖」として希少糖を大々的に紹介されましたが、その語り口は明快、かつウイットに富んでいて、ゴールデンアワーの全国放送にもかかわらず緊張されたご様子は微塵もなく、その辺の居酒屋でリラックスしておしゃべりされているような感じで、その情報発信力には驚嘆いたしました。普段全国レベルで扱われることの少ない香川大学を鮮烈にアピールされました。放映後、本学に多くの問い合わせが寄せられたとのことでした。

このような多面的なご活躍は、口幅ったい言い方になりますが、才気煥発という表現がぴったりの並外れたお力によるものなのだろうと思います。会議でもすべてを瞬時に把握され、他の人の発言を適切に言い換えて皆に問いかけられ、よどみなく会議を進められるさまは、卓越したリーダーにふさわしいお姿でした。寛学長の下、香川大学が着実に前進していく様子が日々の会議にも現れていました。

このたびのご退任で一区切りつきますが、今後も寛先生は香川大学、香川県のためにお力を発揮されることと思います。これからもご健康に留意され、皆に大所高所からアドバイスをいただければと存じます。

KAKEHI

寛善行学長退任記念誌

2023年9月22日発行

発 行 香川大学広報室
〒760-8521
香川県高松市幸町1-1
E-mail kouhou-h@kagawa-u.ac.jp
URL <https://www.kagawa-u.ac.jp/>



学長イメージキャラクター
「ゆきのすけ」の誕生の
フラッシュモブ動画は
こちらから。

